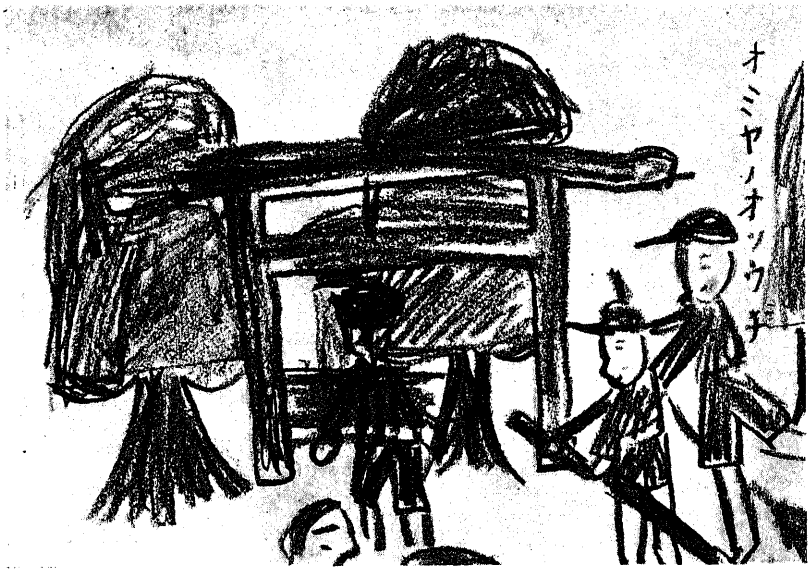
幼兒の教育

昭和十五年一月



年の始めの卷頭を飾るに、何といふ適した繪であらう。もとより賴んで描いてもらつたのではない。汽車を描いても、お團子を描いても勝手な自由畫題にあつて、こういふ繪が描かれたのである。母につれられてのお詣りでか、或はふとした通りすがりでか、恐らく、いつも敬禮をして通り過ぎる鳥居前なのであらう。奉仕隊の靜かなつゝましい行動に、子どもながらに曳きつけられてゐるのである。

子どもらしい敬虔な心もちが、どこといふことなく畫中に感じられる。立ち止つてそつと見てゐるやうな謙遜な心もちも、どこといふことなく籠つてゐる。お掃除が濟んだら、神殿に近く頭を垂れたい仰高の心もちさへも、しつとりと滲み出てゐる。——ひとりで鳥居の下を入らうとする子ども、それは此の小さい畫家自身の後姿なのでもあらうか。いづれにしても、子どもの心の中には、斯ういふ繪を自然に描き出づる心があるのである。貴いことである。

（倉橋惣三）